

ある老婆の話

牧草 泉

プロローグ

その日は寒かった。私は老人福祉センターに行くことにした。センターには、食堂、風呂、運動ルーム、機能回復プールなどがある。私の目的は風呂だった。巡回バスが一日に四回廻って来る。この巡回バスは無料である。普通にバス、電車と乗り継いで行くとする往復千円ほどかかる。だから年金生活者にとっては無料巡回バスはありがたい存在だった。

老人福祉センターの大浴場は、自宅の狭い風呂よりはるかに入り心地がよく、私は平均一週間に二度ほど利用している。私の家の近くからは、メンバーは入れ替わることはあるが、常時三、四人が利用している。このバス停近くには二個の大きな団地、M団地、Q団地があつて、それぞれ四百所帯、二百所帯ほどが住んでいる。転居してきた当時、つまり三十年ほど前は、これらの団地は中堅の働き手の家

庭であつたのだが、今では老人が目立つようになっている。特に私のいるM団地は団塊の世代が寄り集まつている団地といえれば分かりやすい。私もその一人である。

いつだったか、たまたま巡回バスで老人福祉センターに行くという老女と一緒になつた。気さくな人で、向こうから話しかけてきた。彼女の話によると、もともと地の人で、近隣の村から嫁いで来て、もう五十数年になるという。

そのときは、気候の挨拶程度の話で終わったが、それから時々同行する機会が増えて、いろいろと彼女の過去を聞くことになつた。私から根掘り葉掘り聞いたわけでは決してない。私に気を許したのか、話しやすかつたのか、センターの休息室で顔を合わせると、傍に来てぼつりぼつりと身の上話をしてくれたのだ。おそらく自分の生い立ちが私と似通っているのを感じ取つて、心を許したのだろう。

話しぶりからして単なる農家の嫁の話を超えていて、こちらからもいろいろ相槌を打ちながら、尋ねたこともあつた。以下は彼女の話を一人名語りに書きとめたものである。

一。

私は秀平久代と申します。今年の十二月で満八十歳になります。嫁いできてからずっと百姓をしてきました。もちろん今は長男に譲つて、年金生活ですね。腰が少し痺れがあることと左足の膝関節が痛むのがつらいんですが、その

ほかは健康です。かかりつけのお医者さんからは、「七十の後半になってその程度の不便をかこつだけなら、しごく健康なほうだから、ありがたく思わないとね」、なんて言われています。そういえばまた入れ歯はしていないし、腰も曲がついていないし、健康なのだと自分に言い聞かせて毎日を送っています。

私が隣のY村からこの地の農家に嫁いで来たのは、定時制高校を卒業してからすぐのことです。だから十九歳を過ぎてまもなくしてのことでした。嫁ぎ先は、田んぼが一町二反ほど、畑が五反ほどありました。当時でいえば、中農といったところだったのでしよう。

実家は田んぼが七反ほど、畑が三反ほどで小農でしたね。収穫物だけでは金銭所得が少なく、父は農閑期には土建会社に土方として稼ぎにいつておりました。極端にいうと貧農の部類でしたね。

父は「うちの家系はもともと旧A藩の武士だ」という意識が強く、家の仕来りにもやかましかつたですね。あるとき母が近くの小川で洗濯をしていたところ、たまたま父が通りかかつて、「下着ならともかく、上着などは小川で洗濯をしては駄目だ」と言つて母をやかましく叱つていました。母は家の近くだからということでは仕事着を洗つていたんですが、父はそれを認めなかつたんです。

当時は敗戦後すぐのころで、石鹼も簡単には手に入らな

い時代で、川で洗濯をする人も多かつたのです。今ほど川の汚染はなくきれいな水でしたが、川で洗濯をすること自体が父の意に反していたのでした。

食事をするときも、必ず「いただきます」、食事が終われば、「ご馳走さまでした」と言うことが慣わしでした。もつともこの食前食後の感謝の気持ちの言葉は私の家だけではありませんでした。同じ部落のほとんどの家庭でもしていたことだと思えます。米を作つてくれた人や、野菜を作つてくれた人に感謝をする意味でしたから、いい習慣だつたと思えます。茶碗に一粒のご飯粒が残つていても、「お米を粗末にはいけない、作つた人の恩を忘れることになる」と、母から叱られたことがあります。今は食前食後にそんな感謝の言葉を言う人はほとんどいないようです。

婚家でも実家の家訓に倣つて子供にも食前食後の感謝の言葉は言わせていたんですが、夫はそんなことには無頓着でした。婚家にはそんな習慣がなかつたのでした。そのせいでしようか、子供も成長するにつれて、言わなくなりました。夫が「そんなことはさせるな」と反対したわけではないんです。私が常時躰しなかつたことが原因なんです。それと、「嫁しては夫に従え」ということも遠因として私の心にあります。それに加えて、私自身が婚家の習慣に慣れ親しんでいったからでしょう。

実家では、また風呂に入る順序もきちんと決まっております。祖父が入り、祖母が入る。次に父、男の子供、女の子供。最後が母でした。私たち子供は寝るときは、「お父さんお休みなさい、お母さんおやすみなさい」といって寝床に入りました。そんなこんなで、父は俗にいう頑固者でした。

高校に進学するについては、大学にも行きたいな、という思いもいくらかあつて普通高校受験を希望していたんですが、父は許してくれませんでした。「女には学歴なんか必要ない」と言うのでした。父としては中学を卒業すれば十分だ、百姓の娘に勉強は必要ない、いざれ百姓に嫁いでいくのだから、という思いだったのでしょうね。

父が高校進学を認めてくれたのは、担任の先生の側面援助があつたからなんです。進学指導の面接で、「父が反対しますので高校進学は諦めました」と話したら、先生が、ちよつと首を傾げて考えた後、私に言ったんです。「百姓の娘だから、お父さんの言い分は分からないことはないけどね。お前ははじめに勉強してきたし、成績もいいほうだし。これからは、百姓は田んぼを耕して米を収穫していればいい、という時代じゃなくなるぞ。急速に知識・技術社会になっていくんだ。高校までは行っておいたほうがいいぞ」と、背中を押してくれたんです。でも、そのときは、父が反対しているので、私は先生には何とも言えませんで

え、私はその場にはいませんでしたから、二人の声が漏れでてくるのを聞いたに過ぎないんです。だからどんな具合に話が進んでいったのかはわかりません。

一時間ほど過ぎたでしょうか、先生が座敷から出てきました。私を見つけると、にこつとして、「お父さんが進学を認めてくれたぞ」と言ってくれました。もちろん私はうれしかったですね。でも飛び上がるほどの嬉しさはなかつたですよ。成績がいいといつてもトップでもなかつたし、勉強を何が何でも続けたいという気持ちもなかつたし、また、自分は百姓の娘だから、百姓の嫁になるのは、当たり前だ、というより仕方がないと思つていましたから。またそれ以外に将来に明確な目的があつたわけでもなかつたんですよ。

だから、先生が声をかけてくれたときは、感謝の気持ちと同時に、これからも勉強をしなければならぬという義務感が少し重荷になりましたね。

田舎の中学でしたから、高校進学といつても、クラスの中で進学するのは三十%程度でした。それもともに普通高校に進学する生徒は一桁でしたね。残りは実業高校や、定時制高校でした。

そんなわけで私も進学できることになつたんですが、父が希望した進学先は農業高校でした。担任の先生と父の妥協点が農業高校だったんですね。父としては百姓の嫁とし

した。

ところが、数日たった夜半に、先生が私の家に行つてきたんです。そうして父に「進学させてやったらどうですか」つて助け舟を出してくれたんですよ。父は、当然反対でした。そのときは、先生はそれ以上、進学については何も言わないで帰っていきました。どうやら、酒飲み会の後にやつて来たらしいんですよ。先生が帰つた後、父が「先生は酒臭かつたぞ。いっぱい引つ掛けてきたんだろう」と、言っていましたからね。

その翌日に私は先生から呼び出しを受けて職員室に行つたところ、「お前は、進学についてどう思つてるんだ？ 高校は行かなくてもいいのかね？」とまた尋ねました。

私は答えました。

「父が反対していますので、それでいいんです」

「じゃあ、行きたいという意思はないということだな？」

「行きたい気持ちはあるんですけど……」。

先生は領きながら、「なんだ、行きたい気持ちはあるんだな」と言つと、じつと食い入るように私を見つめました。

私は再度領きました。その先生の眼差しは、ぜひ高校進学はせよ、と言つているように思えました。

数日後の夕方、再び先生が家に行つてきて、父に再度進学を勧めました。父は前回と同じく進学不要論を展開していました。時々言い争うような声も聞こえてきました。い

て責任が果たせるようにという思いがあつたんでしょう。

でも、私はふと思ひ出したんですよ。同じクラスの裕福な家庭の男の子が、友人に言つていたことを。「農業高校は、ウンチやらシヨンベンを畑にまく方法を教える学校だ」と。私はこれをそのまま信じていて、内心、農業高校には行きたくないなと思つていました。本当かな？ との疑いもあつたんですが、糞尿を樽に入れて、畑で撒いている自分の姿を思い浮かべると、農業高校への意欲は薄れていきました。

当時は家庭の糞尿が肥料としてふんだんに使われていました。私の家でも肥え壺が一杯になると父や母が大きな杓子で糞尿を掬いだして肥桶に入れて、それを田畑に運んで散布しておりました。

私たちの小学校でも、学校の便所の糞尿を肥桶に取り出して、学校所有の畑に散布することがありますよ。担任の先生が率先垂範して糞尿の汲み取り方撒き方を教えてくれましたね。ただやはり自分の排泄物だと思つても、糞尿の臭いは嫌だつたですね。こういう実体験もあつたから、農業高校には抵抗があつたんです。今のはやり言葉借りると、農業高校つてダサイなあつて思つていたんですね。後で知つたんですが、人糞肥料の施し方なんか農業高校では教えることはないつてことでした。私が男の子の冗談を信じ込んでいたんですよ。

そこで私は父に相談したんです。農業高校じゃなくて定時制普通高校に行きたいと言つてね。父は「いずれ百姓の家に嫁いで行くんだから、農業高校でいいじゃないか」と言いましたね。私は「それはそうだけど、定時制普通高校のほうが家の手伝いは毎日できるよ。農業高校では農繁期しか家の手伝いができないよ」と、糞尿桶を担いでいる自分を思い浮かべながら、必死で父を説得しました。

当時、近くのY農業高校には全日制課程と昼間定時制課程がありました。昼間定時制では農繁期は家の手伝いのために休校になるんですよ。だから農業高校でも全日制課程では三年で卒業できるんですが、昼間定時制課程は修業期間は四年でした。

父はそのときは「考えておく」と言つたきりでした。でも、数日してから、父は定時制普通高校行きを認めてくれました。たぶん、農業高校と定時制普通高校を比較して、定時制普通高校に行かせたほうが家の手伝いは余計にくれる、と思つたんでしょうね。もちろん知人にも聞いたに違いないですよ。母にも尋ねたはずです。母が私に言いましたよ、「あんた夜間部でもいいの？ 冬がづらいんじゃないの？」とね。

私の部落から高校までは、およそ十キロほどありました。冬には雪がたくさん降りましたから、夜の通学は大変だったんですよ。みんな自転車で通学していましたね。バスも

途中までしかなかったんです。私の家からバス停まで四キロ、バス停から高校までが六キロほどなんです。学校の授業は夜の九時に終わるんです。夜の十時ごろ、バスから降りて自宅まで山道を四キロ歩くとね、遠すぎますよ。それとバス代が高いこともあって、バス通学は貧乏百姓では無理だったんですよ。だからどの家庭も高校通学は自転車でしたね。

当時は今とは大違いで、田んぼは鋤を牛に引かせて耕していたし、稲も苗床を作って、そこで丈が二十センチほどになった苗を、田んぼにかがみ込んで植えていたんだし、田んぼの草取りも、四つん這いになって取っていたんだし、とにかく力仕事ばかりで、人手が多くなると農業は成り立たなかつたんです。だから私の存在は、我が家にとつては必要条件だったんです。私もそれは十分に知つておりました。

二.

私の通つた小学校は峰国民学校といって、小高い丘の上にあります。私の部落から国民学校までおよそ四キロほどです。子供の足で一時間ほどかかりましたね。みんな歩いて登下校しましたよ。部落内の子供を上級生が誘つて一緒に通学するんですよ。私には弟と妹がいましたから、私が三年生になると二歳下の弟を連れて、六年生になると妹

が加わり三人で通学しました。もちろん友人たちと一緒になんです。当時は兄や、姉が弟や妹の面倒を見るのが普通でした。

百姓をしている家庭ではみんな子守は年上の子供がしていましたね。両親は農作業で忙しく、子供を見ている暇なれないんですよ。だから、私も小学校に上がる前から、弟の子守をしていました。弟や妹の子守をしながら友達と遊ぶんですから、それはそれは大変でしたよ。遊び友達の条件はみんな同じですから、お互いに助け合つて遊びましたよ。石蹴りするときは見学している友達や弟や妹の世話をしてくれましたし、逆の場合は私が友達や弟や妹の面倒を見ましたね。弟を背負っている背中が熱くなるときが時々ありました。弟が負ぶさつたまおしつこを漏らすんですよ。生暖かいおしつこが私の背中を伝い、お尻に落ちて足へとだらだらと落ちてくる。でも嫌だなあと思ひながら、遊びに夢中でした。「おしつこをするときは、言わないとだめよ」と一度は叱つたものの、それ以上弟には何も言いませんでしたよ。友達だつて男の子、女の子を問わず誰でも経験していることでしたからね。子守とはこういうものなんだと誰もが諦観していたようです。

テレビもない時代でしたから戸外で遊ぶといつても石蹴りやかくれんぼ、ビー玉遊びなど、たいした遊びではなかったんですが、当時はそんな遊びでも退屈することはほと

んどありませんでしたよ。

小学校へはわらで編んだ草履を履いていきました。男の子の中には裸足で通学する子も珍しくなつたですね。草履は祖父が編んでくれたものです。祖父の草履は非常に出来がよく履き心地がよかつたですね。時々、「あなたの編む草履はとても立派だね。村一番だよ」と褒めちぎる人もいました。でも学校まで往復二里ありましたから、三日も履くと、鼻緒が切れたり、底に穴が開いたりして履けなくなりました。時々学校でゴム靴の配給がありました。これは抽選で当たつたものが購入できるんですが、私は運がないんですね。ほとんど当たつたためしがありません。一度だけ、当たつて大喜びしたんですが、一日学校に履いて行つたらすぐに破けてしまいました。とてもがっかりした記憶があります。そうして思つたものでした。「やつぱり、じいちゃんの編んだ草履がいい」と。

小学校までは道草をしないで歩けば四十分ほどで行けるんですが、友達とおしゃべりしたり周囲を見たりしての通学でしたから結構時間がかかつていたようです。下校時はもつと時間がかかりましたね。途中でレンジ畑に寝転んで友達と話し込んだり、友達の家立ち寄つて、お菓子ももらつたりしてしまいましたから、結構一時間半、ひどいときは二時間以上かかりました。さすが、冬は寒かつたから、道草することはほとんどなくなつたですね。

春にレンゲ草の畑に寝転んで友達とおしゃべりするのは最高でしたよ。レンゲ草からひんやりとした冷気が背中伝わってきて、空は晴れ渡り、真綿のような雲の塊が流れていくのを見てみると、自分がその雲の中に吸い込まれて一緒に流されていくようで、うつとりとしたものです。今思い出してもあのときの光景は鮮明に浮かんできますよ。

もちろん農繁期は、道草をせずに帰りました。親から早く帰ってこいと言う命令が出るんですよ。急いで帰つてくると、弟や妹の面倒を見たり、夕ご飯を炊いたり、夏には田の草取りをしたり、稲刈りのときは稲束を運んだり、冬には麦踏をしたりしましたね。

三.

私が入学した当時はまだ太平洋戦争中でしたから、何もかもが大日本帝国の風潮に満ちていました。一週間に二回ぐらい昼休みに、運動場を四列縦隊になつて行進させられました。校長先生が壇上に立っていて。その前を通るときは先頭を行く級長が「捧げ 銃っ」って号令を掛けるんですよ。私たちはそれに合わせてさっさといつせいに校長先生のほうに右手を上げて顔を向けます。校長先生はその時敬礼をするんです。右手が銃を代用していたのでしようね。

夏は行進すると汗だらけになり、のどが渴くんですよ。だから行軍が終わると一斉に裏庭を流れている小川に走つ

ていつて小川の水をわれ先に手ですくって飲んだものでした。水道もあつたんですが、とてもとても長い順番待ちで、何時飲めるか分かりませんから。

私の村から二十キロほど離れたところに軍用飛行場があり、よくアメリカの艦載機が襲ってきました。空襲警報が出る先生が慌てふためいて教室にやってきて、「今すぐ家に帰りなさいっ」って言うんです。若い女の先生は、どの先生も顔色は蒼白で恐怖におののいている風でした。私たちは空襲警報よりは、女の先生の恐怖に満ちた表情を見て、不安に煽られ急いで教科書などをランドセルに入れて、自宅へ帰つたものでした。あるとき帰宅中、艦載機が低く飛んできて、びつくりして麦畑の中にもぐりこんで身を潜めたこともありませぬ。空襲警報が鳴ると先生たちが私たちを即座に帰宅させたのは、学校が攻撃されると多くの生徒の命が奪われる恐れがあるという理由だったんですよ。でも二年生のときのクラスの前崎静香先生は、空襲警報が鳴つてもあわてることはなかつたですね。「今、空襲警報が出たから家へ帰りなさい」というところまでは他の先生と同じだったんですが。特にあわてる風でもなく緊張してた様子でもなく、私たちに「用心して帰るのよ」と、声をかけてくれました。私たちも三崎先生の指示を受けて下校するときは、それほど恐怖心はなかつたですね。

空襲警報が鳴ると他の女の先生は職員室から駆け足で教

室に来るんですが、三崎先生だけは走ってくることはなかつたですね。普通の足取りできました。これだけでも際立つて違っていました。

そういえば、峰国民学校には女の先生が多かつたですね。若い男の先生は兵隊にとられていたためでしょうね。

この空襲警報のとき以外は、女の先生もみんないい先生でしたよ。

後から思つたのですが、艦載機の目標は飛行場だから、こんな田舎の学校を狙うことは絶対じゃないんですね。このことを三崎先生は知っていたんだと思います。もちろん、度胸もあつたんでしょうけどね。

そうそう、三崎先生といえは、時々三歳くらいの子供を学校につれてきていましたね。家で子供を見にくれる人がいなくなつたんでしょう。どこで、どう躩したのか、先生が授業中のときは、子供は廊下で独りでおとなしく遊んでいました。余談になりますが、この子は成人して自衛隊に入り、陸将になりましたよ。「あいつは先生の度胸を遺伝として受け継いでいたんだ」という話を彼の同級生がしていました。

終戦間近になると空襲警報が出される頻度が増えてきました。家にも、艦載機が飛んでくると、あわてて防空壕へと避難しました。防空壕は十数人が入れる程度のもので、数軒の家で共同して地下に掘った避難場所でした。時々

夜に空襲警報が鳴って防空壕に避難していると、米軍の艦載機が近くの上空を旋回しているのか、爆音が連続して聞こえることがあります。そんなときは、「防空壕から顔を出すな。大声を出すな、見つかったら撃たれるぞ」との大人の忠告で、みんな息を潜めて座っていましたよ。でも、これもあとから考えると、常識からかけ離れた行為でしたね。防空壕の中での話し声が、艦載機の乗務員に聞こえるはずはないでしょうから。また、艦載機が田舎の村人を狙い撃ちするなんてありえないことですからね。もっと大きな攻撃目標があつたはずですからね。

私が四年生のときに、終戦になりました。夏休み中でしたから、玉音放送は母の実家で聞きました。父は海軍に入隊してましたから、私は弟、妹二人とともに母の実家で暮らしていたんです。

叔父が縁側に座ってラジオから流れ出てくる天皇陛下の終戦の詔勅を聞いていたので、みんな寄り集まって傍で一緒に聞きました。ラジオは雑音がひどくてよく聞き取れませんでした。叔父も「よく聞こえないなあ」と嘆じておりました。

でも戦争が終わつてみんなほつとしていましたよ。私も、もう空襲もないんだ、警報も鳴らないんだと思うとうれしかったですね。

叔父はもともと戦争反対だったのでしようね。「負ける

ってわかっていたのになぜ戦争に突っ込んだのかねえ」と独り言を言っていたのを覚えています。当時も、国民すべてが一丸となって戦争に逸っていたのではないことを子供ながら知りましたね。

叔父の論理はこういうことでした。「弱小国が大国や連合国を敵に回して、負けるかわかっている戦争を始めるなんて狂気の沙汰だ。これだけで政治家失格だ」と。戦争をしないで耐え忍んだ場合の国益と戦争をして負けた場合の国益を比較考量したのか？ というものでしたね。さらに「小国が大国に戦いを挑んだら、外交力を駆使して休戦に持つていくのは必要条件だ、その外交力が日本には全く欠落していた。日本にはタレーランがいなかったんだ」と憤慨しておりました。これは高校生のときに、改めて叔父の話を整理したものです。当時私は国民学校四年生ですから、叔父の言うことなんかわかるはずはないのです。タレーランという人は、後で知ったんですが、フランスの外交官でウィーン会議でしなやかでしたたかな外交を展開したことで有名なんだそうです。

そういえば、高校でも社会科の先生が「日本の外交は世界一下手だ」と言っていたのを思い出します。戦後七十年、現在またまた、その外交下手が、日本を亡国に追いやるのではないかと心配する人も多いようですね。

戦争が終わると空襲警報もなく、防空壕に避難する必要

のクラスも、ドッジ・ボールばかりしていたからね」という同窓生もいますから、他のクラスをとやかく言えた柄ではないんですね。おそらく、戦争で生徒が心に傷を負っているから、ということと体育授業が増えたんじゃないかと思っっています。

四.

私の初潮は小学五年の秋でした。下校しているとき下着がじとりと濡れてきたんです。夏休みに入る前でした。だから七月の初潮だったと思います。おしっこが漏れたのかなって思っ、びっくりして手で下着を触れてみると、手指に真っ赤な血が付着していたんです。あわてました。まったく予想していなかったんです。年上の中学生の話では、中一前後だと聞いていましたからね。

とにかく母に知らせないと、という気持ちでした。友人をせかせて帰りましたよ。友人はいつもとは違う私の態度に怪訝な表情をしていました。

家に帰ると、母が畑仕事から戻ってくるのを待ちかねて出血したことを話しました。母は笑いながら、言いましたよ。「お前も一人前になったんだね。でも、お前って、おませなんだね。誰に似たのかな？ 早すぎるよ」ってね。そうして下着を井戸端で洗いながら、母は独り言のようにポツリとつぶやきました。「お前も男で苦勞するのかね」

もなくまりました。学校でも行進は中止になったし。生徒の表情も戦争時代とは打って変わって穏やかになったと思えます。

学校生活でも大変化がありましたね。たとえば教科書がところどころ黒く塗りつぶしてありました。大日本帝国万歳・鬼畜米英的要素が表示してある頁が対象だったんですね。先生の指示に従って生徒自身で塗りつぶしたこともありましたよ。

でも生徒より先生たちが一番苦勞したんでしょうね。今までの大日本帝国が一夜にして民主国日本に変わったんですからね。

授業で記憶に残っている変化は体育関係の授業が増えたような気がします。隣のクラスは男の先生で、しょっちゅう野球をしていましたね。いつ勉強しているのかな？ というくらい野球ばかりでしたよ。でも、みんな楽しそうでしたね。後になって同窓会で、「あの時、先生が野球ばかりしないで、もっと勉強を教えてくれたら、俺はもっと偉くなれたんだが」と言う同級生がいましたが。でもそんなことをジョークで言いながらも、その先生にはみんな感謝していましたね。

私のクラスが授業ばかりしていたかというところ、そうでもありません。女の先生ですから野球はできませんけどね。その代わりドッジ・ボールをしましたね。「あんたんとこ

つてね。

今でもそのときの母の表情を思い出しますね。その声も耳に残っています。私の行く末を占ったような独り言でした。でもそのとき母は自分の過去をも思い出していたに違いないんです。これは後になって気がついたんですけどね。そうです、私も母のあとをたどるような人生を送ることになるんです。このときは気がつかなかったのですが。

母も一通りでない過去をもっていることは、中学になって少しずつ分かってきました。いえ、母が直接話してくれたわけじゃないんです。母と交わす会話の中で母の過去がちらちらと見え隠れしていたことは当然ですが、それと、父との会話の中からも浮かび上がってきましたね。つまり父の話の中にも母の過去を裏付ける状況証拠がありました。そうして父と母の会話の中からも。

後々思ったんですが、父は母の過去を知ったうえで、一緒にになったんでしょうね。でもどの程度知っていたのかとみると、分かりません。たとえば私の人生を振り返っても、私の行動、考えをすべて知り尽くしている人はいないんですから。それと同じで父も母の過去のほんの一部しか知らなかったんだと思いますよ。これって人間誰しも同じことなんです。

父は五十八歳で亡くなりました。肝臓癌でした。今は治療すれば助かる場合もありますが、昔はほとんど癌といえ

ば死の病でしたからね。父も例外なくやせ衰えていき、亡くなったのは霜が降り始めた頃でした。別に特別なことも起こらずに、誰もがたどるような一生でした。若すぎたということはありませんが…。

特別なこともなく、といったのは、実は母については特別なことが起こったんです。母にといいよりは私にとつてなんです。実家は弟が父の後をついでいました。長男です。近頃は当然なことですね。母が病に倒れて、たまに見舞いに行っておりましたが、ややもすると途切れがちでした。弁解になりませんが、私もいろいろと忙しかつたのです。近いからいつでも行けるという思いもあつたと思います。「あなたに特別なことって何なの？」と問われますが、ここで話すのはちよつと躊躇しますね。別に深い心の傷を負つたということではないんですが、やはりショックでしたよ。

両親と十九歳まで一緒に暮らしてきましたんですが、近所の夫婦と比較しても、父と母が同居しているだけ、という思いにとらわれることがありましたが、私の短い夫婦生活を省みても、互いに何か欠けていたのではないかと、という思いがしてなりません。私と夫の仲が悪かつたとは思いませんが、お互いにひそかに隠し持った部分があつたように思います。これは夫が亡くなつてから、ふと思つたことでした。

結局夫婦は永遠に他人でしかありません。夫婦を結び付けているのは、お互いの愛情なんです。これがまったく空漠としたものなんです。

五.

田舎というところは、意外とお互いに情報交換はしても、外部には漏らさないとしますよ。お互いに身内だから、という意識がそうさせているんだと思います。

たとえば、ある家のどら息子が、警察に厄介になつたとしますね。いえ、これは事実そういうことがあつたんです。同じ部落の中堅農家の息子が、運輸会社に勤めていたとき、会社のお金をくすねて首になつたんです。そのために訴えられて警察に呼び出され、犯行を認めた結果その場で逮捕されたんです。父親が東奔西走して手を廻し、会社に詫言を入れて告訴を取り下げてもらつたんです。だから幸いにも新聞には出なかつたんです。たぶん横領金額が小額で父親がすぐに弁償したんでしょうね。

この話は部落の者はみんな知つていて、当事者の母親も、近所の人に自分のできの悪い息子の話をしてるんです。もちろん涙、涙の嘆きの話ですよ。悩みは一人で抱え込むよりは人に話すと、精神衛生的にもいいし、周囲が慰めてくれたり、励ましてくれたりします。だから人に話せば心の重荷が軽くなりますから。母親の気持ちは十分理解でき

ます。

このどら息子の不行跡のうわさは部落内だけでほとんど留まるんですよ。つまり、となりの部落には広まつていかないんです。意外と部落の人々は口が堅いんですね。後々私は思つたんですが、部落の間はお互いに相互扶助の關係で生きてきているんですね。いわばお互いが一種の身内なんです。だから部落内ではいろいろ非難したり批判したりはするんですが、他の部落へは漏れ出て行かない。

普通はこんなことをしてかしたら、嫁さんの来てはいないんですが、このどら息子は近所の部落から立派な嫁さんをもたらしましたよ。部落の誰かが言っていましたね、「あのどら息子も前科一犯だから本当は嫁さんなどもらえないんだけど、ここで生まれてよかつたんだよ」とね。本人にとつて悪いことは、誰も口をつぐんで嫁さんには話さないんです。

嫁さんからすると中堅の農家でお金もほどほどにあるし、財産もそれなりに持っている。いいところに嫁に来た、と思つているんです。また嫁さんの実家はごく小さな農家でしたからね。嫁さんの両親としては上々の家に嫁がせたと思っているんですね。もちろん、永遠に秘密がばれないわけではないんですが、仮にばれたとしても、数年後なんです。その間は部落の者もかん口令とはいわないまでも、人にはしゃべらない。意識しているのではないんです。

ね。その部落の慣行に従っているんですよ。やはり、「郷に入れば郷に従え」ですか。後々仮に夫が前科一犯だつたと分かつて、すでに子供もいるんだし、嫁さんはいまさら実家に帰つても居場所はなくなつていますから、離婚ということにはなりませんからね。

こんな例は他にもありましたよ。県の出先機関の事務所に勤めていた若者が、これも金をくすねた模様で、懲戒免職。具体的にどんなことをしてかしたのかは、部落内の者もよく知らないままに七十五日が過ぎてしまいましたね。この若者もそ知らぬふりをしてかわいい嫁さんをもたらしましたよ。

部落の人間はみんなこんな具合ですから、私も自分の母がどうやって父と一緒になつたかも具体的には知りませんが、母の実家に行つても母の生い立ちは詳しくは話してくれませんから。

母が旧制女学校を中退したことは知っていますが、なぜ中退したのかは、詳しくは知りませんでした。母方の祖母の話によると、「家の仕事が忙しく、人手が足りなかつたから家の加勢をさせるために中退させた」ということだつたんです。でも母の実家は裕福な家庭でしたから、人手が足りないということはないはずなんです。田植えなどは親戚からの応援も来ていましたし、それ以外にお金を出して雇っていましたからね。だから祖母の言っ

たことはほとんどウソだということなんです。母は旧制女学校を中退すると和裁学校に行っているんですよ。この学校はかなり遠くの大きな町にあつて家から通学できないの寮に入っていたそうです。

母自身も自分の過去については機嫌がいいときは、ポツリポツリと話してくれましたね。友人のことか先生のこととかですね。でも、その話は点でしかなかったですね。母は無意識に連続した線を描かせまいとしていたんですよ。

たとえば友人の恋愛の話をしているんですが、突然別な話へと急変するんですね。後で推測したんですが、他人の恋愛と自分の恋愛が混ざり合っていて、混乱したんだと思います。友人のことだった話が、自分のことへと変遷していきます、ふと知られたくない部分に来て急に話を変えたり、断絶させたりしたんだと思います。

ひよつとしたら、友人の恋愛物語が、ほとんど自分の恋愛物語じゃなかったんだろうかとも思っていますよ。主語が「私」であるべきを「彼女」にしていた？ そんな気がしますね。

大人になるにつれて、周囲からぼつぼつ漏れてた話を聞いて拾い集めた個々の状況証拠を分析して、ジグソーパズルのように当て嵌めていく。そうするとぼんやりながらその人の過去が浮かび上がってくるんです。母の過去もそ

なかつたことは確かですね。それでも後で気がついたんですが、「私はまだ若い女なんだ。これでいいのか？」ということが心の奥底にあつたんですね。おそらく、私が模索していたんではなく私の体が叫んでいたんですね。それが私を突き動かしていたんだと思います。

でも変でしたよ。夫が亡くなった時、自分では泣き崩れるだろうと思っていました。涙もちよつと出たきりでした。夫が嫌いだったわけでもないのにね。ああこれが死というものかという感慨ばかりが先だつて出てきましたね。死ぬということについては、実家でも曾祖父や近所の人々の死で何度も経験していましたが、それとほとんど変わりはなかつたんですよ。その時夫の遺体が入った棺を見ながら思ったことでした。夫とは見合いで結婚したんですが、ひよつとしたら、私は夫を愛してはいなかったのではないかと、思ったことでした。本当に愛していた夫であればその死を迎えて、動転して、嘆き悲しむのではないかと？ そうでないのもしかしたら、単に夫婦という慣習の虜になつていたんじゃないかと思つたんですよ。

布団に横たわっている夫の亡骸を見ながら、自分の平靜さに驚きながら思つたものでした。「涙が出ないのも当然なんだ。夫婦つてもともと他人なんだから」ってね。でも、出棺のときは少し涙が出ましたね。でもそれも瞬時で納まりました。この出棺時の涙がなんだつたのか、今でも分か

のようにして知つたのです。だから田舎の部落に住んでいれば隣近所との上手な付き合いが必要なんです。もちろんそんな意識を持つまでもなく、みんな誰とでも付き合い合っていたんですが、それぞれ個人としては、その部落の習俗にしっかりと従つていたというか、なじんでいたんですね。近所との付き合いがいい関係であれば、いろんな情報も滞りなく入ってくるし、不利益な情報は外部に出て行かない、ということですよ。

六.

夫が亡くなったことは前にも触れましたが、でもあんなに医者と言通りになると思つてもいませんでした。夫は三五歳の時に亡くなったんですが、誰が見たつて働き盛りでしたからね。「夫が亡くなると、どうなるんだろう、どうしたらいいんだろう」と、夫のやせ衰えていく顔を見ながらいろいろ考えましたよ。でもどう考えても新しく活路が開けるわけではないし、また百姓をしているんですから、自分から逃げ出すこともできないだろうと思つていましたね。第一、婚家を出ても、手に職をつけているわけでもないし……。でも迷つたということは、私もこのままでは終わりたいくないという思いがありました。じゃあ、それは何か、ということなんです。何も女として独り立ちしてとか、特別な技術を身につけて生き抜こうということでは

りません。

夫との出会いは、田舎でよくありふれて行われていた見合いです。村の有力者が話を持ってきて、これに父が乗つたというストーリーですね。私はどうかというと、百パーセント百姓の娘ですから、百姓の家に嫁ぐものという考えを持っていましたから、夫との見合いに別に反対はしませんでした。仮に反対しても父の一喝を食らつて私は素直に従つたでしょうね。また近所を見ても恋愛をして結婚するという人はいませんでしたからね。

見合ひしたときの感想は、夫はまじめそうでしたので人物的にはそれほど抵抗はなかつたですね。でもね、やはり初恋の彼と比較すると、見劣りがしましたね。当然ではあるんですけどね。農業高校を出て家業を継いでいたんですが、おとなしいとだけしか見えなかつたですね。

見合ひしてから一度だけ、街に出て二人で食事をしたことがあります。今のように自家用車もなく、夫からの電話では××喫茶店に来て欲しい、という連絡があつて、自転車とバスを乗り継いで行きました。この連絡も、当時は部落にはどこの家庭にも電話は来ていなくて、仲人をしてくれた人がわざわざ自転車まで来て伝えてくれたんですよ。もちろん私が承諾したこともその人がまた自転車で夫に伝えてくれたんですよ。

その時どんな話をしたのか、はつきり覚えていませんが、

彼の実直な性格は十分理解できました。でもどこかで初恋の男の子Kと比較してるんですね。夫は農業高校を出ていました。夫は言いました。「俺は百姓の息子だ。だから百姓が一生の仕事になる。一緒に協力してほしい」。これが彼からの求婚だとわかりました。私の返事は「よろしくお願ひします」でしたね。

私の初恋の相手であるKは、父親が国家公務員でしたね。普通高校に行つて有名大学の法学部に入りました。学校時代に交際したことつてないですね、当時はそんな交際するつてことはありえない時代でしたから。でも彼も私に好意を抱いていたことは確かなんです。廊下で会うたびに、私に向かってつこり微笑んでくれましたから。卒業式が終わつてクラスに戻るときにそつとよつてきて、「元気で頑張れよ」と言うと、足早に立ち去つていきました。私はともうれしかつたですね。Kとは隣り合わせのクラスどうしでした。同窓会のように、偶然会いましたが、その時はすでに嫁いでいました。彼は私を見つけると、「結婚したんだつてね」と言つて「超早いね」と言つて笑いました。私は頷くだけでした。私は彼が好きで好きでたまらなかつたのに、振り返つてみると、自分から彼に話しかけたことはほとんどなかつたようです。今思うと、やはり社会的、経済的立ち位置の違いから来るコンプレックスがあつたのかな、と思つたものでした。

あるし、生活には困ることはないんだから」とね。私が戻つて来たいつて言うんじゃないかと思つたんでしょうね。私も別に実家に戻ろうとは思つていませんでしたから、頷いただけでしたよ。

母も、「それが一番いいよ。生活は安定してるんだからね。仕事はまだ両親が若いから加勢してくれるよ」と父と同じことを言いましたね。でも母は私を見て、涙を流していましたよ。後で分かつたんですが、あの涙は私のその後の人生を思つての涙だつたのでしよう。

義父が依頼したわけでもなかつたようですが、部落の人々も、時々私に忠告をしてくれました。「今のまがが一番いいんだよ。両親も若いし…。そのうちに慣れてくるよ」とね。

それと部落内では田舎特有の相互扶助制度が慣行化されていて、大分周囲の人々に助けてもらいましたね。忙しいときは、それとなく加勢してくれたり、子供については、上級生や友人がわざわざ遊びに誘つてくれたりしてくれましたよ。つまり子守をしてくれたんですね。もつとも小四と小一の子供だから、それほど手はかからなかつたと思いますよ。でも働く者としては子供の世話の手間が省けてありがたかつたですね。その分野良仕事に精を出すことができましたから。義父は家事だけしてくれば、と言つていました。現実はずいぶんわけにはいきません。農作業でも

さて、夫の死後についてですが、私もいろいろ考えましたね。一番最初に思つたのは、「今後は自分が主役となつてこの家を切り盛りしていくことになる。子供もいるんだから」ということでした。でも、それ以外にこの嫁ぎ先を出たらどうなるのか？ という考えももちろん頭を掠めましたね。そうです、この家を出れば何かのびのびとした自由が待ち受けているんじゃないのか、と思つたんですよ。

夫が亡くなつた時、子供は長男義彦が小学校四年、長女雅恵が小学校一年、義父母がそれぞれ五十八歳と五十七歳でした。

ですから、婚家に留まる限り、それほどの現実的生活の変化は、農作業が以前にも増して負担になること以外は何もなさそうでした。

義父も葬式が済んだ翌日、私に言いました。「あんたも子供もいることだし、このままずつとうちにいてほしい。農作業は俺たちがするから、すこし加勢してくれればいい」つまり家事をしてくればそれでいいからと言つことでした。もちろん家事には育児も含まれています。私は迷うことなく頷きました。

実家の父からも葬式のとくに耳打ちされたんですよ。「女は三界に家なした。もう戻つてくる家はないぞ。子供がいるんだから婚家で子供と一緒に生きていくんだ。田んぼも

準主役程度はこなしたと思ひますよ。

農繁期など忙しいときは、ほかの子供たちは日が暮れるまで私の子供に付き合つてくれることがよくありました。おそらく親から、「あそこは大変だから、お前たちが子供の守りがてら、母ちゃんが畑仕事から戻つてくるまで遊んでやれよ」と言われていたに違いないですよ。

今は他人の子供が人に迷惑を掛けるようないたづらをして、見て見ぬ振りがほとんどですが、田舎では他人の子供であつても大人が注意していましたね。そんな指導を大人から受けて子供は事の善悪を学んでいくんだと思いますよ。ある代議士が、「三世代同居の家庭をつくるべきだ」と言つておりましたが、これは本当だと思ひますね。いつだつたか選挙のときに私の田舎までやつてきて演説していました。

畑仕事の采配は義父がしました。当然今まで経験がありますから当然なんです。でも夫とは少し違つていました。夫の生前にも、時々夫と義父が仕事のことで見解の違ひが生じたときは、二人で話し合つて調整しておりましたので、その違ひを実感できましたね。特に畑の利用では違つていました。

夫は市場価値の高い野菜を生産したい、そうして市場に出して金銭所得を企図していたんですが、義父はまず自宅で消費できる野菜の生産を主眼にしておりました。つまり

余ったものを市場に出すという方法でしたね。金銭所得は農閑期に臨時アルバイトをして稼げばいいという考えでした。臨時アルバイトというのは、わたしの父と同じで土方人夫、工事人夫などが主でしたね。要するに力仕事なんですよ。

農閑期になると土建会社から誘いがあり、そのつど義父は出かけて行きました。工事現場が遠いところにあると、数日戻ってこないこともありました。農閑期といっても農事仕事が多くなければなりません。特に畑仕事は際限なくありますね。だから義父がいなかったときは、私と義母で種を蒔き肥料をやって育てて収穫しました。そうそう、私の世代には無機肥料もありましたが、家庭の糞尿もまだ肥料として利用していましたよ。

今のように水洗便所はどここの家にもなく、汲み取り式でしたから便壺がいっぱいになると大きな柄杓で肥桶に汲み取り、田んぼの片隅にある肥溜めに入れるのです。ここで数日間熟成させてから、畑の野菜などに散布しました。

肥溜めに数日間入れて放置するのは、まだ肥料にならない未分解の糖分とかタンパク質が含まれているので、これを肥料になる程度の小さな分子にするためなんですよ。

糞尿にはいろいろな酵素が含まれていて、この酵素が糖分やタンパク質を分解するんですね。分解中の糞尿は高温になるんです。

で触ったら、イボのようなものがお尻から顔を出しているのがわかったんです。すぐに「回虫だ」ってわかりましたよ。クラスには経験者が何人もいましたからね。わたしはトイレに行って、その回虫を手でつまんで少しずつ引っ張り出すようにしました。これがなかなか簡単には出てこないんですね。強く引っ張ると途中で千切れてしまふんです。千切れると、腸の中に残った半分はまた成長して害を及ぼすんですから、ゆっくりゆっくり気長に時間を掛けました。しかし結局途中で切れてしまつて、取り出せたのは十五センチほどの長さでしたね。そのときはとても残念でした。まだ回虫が体内にいるんだと思うと、今にも腸壁を突き破つて腹の中が回虫だらけになるんじゃないかと思つたものでした。

いろいろ百姓の女にしては詳しいと思うかもしれませんが、中学時代の女の同級生が農業高校に行つていて、授業で習つたことを教えてくれたんです。それを思い出しながら話しているんですよ。「糞尿の撒き方などは勉強することはない」と教えてくれたのも彼女です。「それなら私も農業高校に行つてもよかつたな」とちらつと思つたものでしたね。でも後悔はしてませんよ。普通高校並みの勉強も出来たし、家の加勢も両親が喜ぶほどしたし…。

もちろん酵素もその間に減っていきます。酵素がたくさん存在した状態で肥料として散布すると、酵素が地中の窒素まで吸収して窒素不足となり野菜は貧弱にしか育たないんですよ。何度か温度を測つたことがあるんですよ。七十七度に達したときがありましたよ。これほど高温になると、寄生虫なども死滅することもあるんですね。この半月ほどの放置は一石三鳥ほどの効果があるんですよ。

でも寄生虫には、高温に耐えるのでもって完全駆除は出来ないんですよ。だから私たちの世代は中学校までは、年に一度体内の寄生虫除去薬を学校で飲んでいましたね。そうそう、その薬は海人草ついでましたよ。海藻が原料だということでした。全員のんでいましたから、国の制度だったんですよ。

回虫といえば、時々お尻から出てくることがありましたね。いつだったか、先生が生徒のお尻から顔を出している回虫を手で引っ張つて出したことがありましたよ。少しづつ引っ張り出す必要があるんですよ。そうしないと途中で半分に切れてしまふんです。腸に残った半分はまた繁殖すると、学校の先生が、集会のときに話していました。だからゆっくりと時間を掛けて引っ張り出す必要があるんですよ。大きいものになると体長が五十七センチほどもあるんですよ。

実は私も経験があるんです。お尻がむずむずするので手

プロローグ

ここ数日老女は姿を見せない。ちよつと心配している。年齢が高いだけに、何が起こるかわからない。お互い様なんだが、風でも引いたのかな？ と心配だ。彼女の家はわたしの家からそれほど遠くはない。歩いて二十分程度だろう。しかし訪ねていくのもなんとなくはばかられる。やはり彼女が老人福祉センターに顔を出すのを待つしかないだろう。そうしたらまたこの続き？ を話してくれるに違いない。できれば彼女自身に起きたことも、まだ語っていない後半の人生も聞きたいと思つている。だから、この話については「未完」ということしておきたいと思う。